The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	西インド,ラバーリーの刺繍布 : その変遷と社会的認識
Author(s)	上羽, 陽子
Citation	デザイン理論. 2006, 48, p. 90-91
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53283
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

西インド，ラバーリーの刺繍布 ── その変遷と社会的認識

上羽陽子／大阪芸術大学

本発表では，ラバーリーの刺繍布がカッチ県の手工芸の代表的な扱いを受けるようになった経緯と，ラバーリー社会がこの動きに対してどのように認識をして，何故「刺繍禁止令」を発令したか，その変遷をラバーリー社会の変化とインドおよびカッチ県での手工芸振興活動とを照し合せながら考察を試みた。

調査地である西インド，グジャラート州カッチ県は，パキスタンとの国境沿いに位置し，年間降水量400mm 以下の乾燥地帯である。カッチ県では染色，織物，陶芸，金工，革細工，木工など「カッチワーク」と呼ばれる多様な手工芸が盛んに行われ，近年『*The Arts of Kutch*』[2000 LONDON] や『*Kachchh*』[1998 RANDHAWA]，などの出版物で紹介されている。

これらの出版物の表紙を飾る代表的な民族集団として，ラクダやヤギなどの牧畜を主な生業とするラバーリー（Rabari）が取り上げられている。彼らの牧畜生活は固定した村に家を持ちながら，1年のうち約10カ月間を家畜に与える草を求めて家族ごと移動する移牧である。また，ラバーリー全体ではこのような移牧を行っている者は約70%であり，残りの約30%は一つの村に定住し，家から少し離れた場所の野原で家畜を飼い，日中に放牧をさせて生活をしている。カッチ県にはカシ，デバラヤ，ヴァガディアの3集団が居住し，その人口は約15,000～18,000人（カッチ県総人口の約1%）とされている。

表紙として取り上げられる題材は，ラバーリー自身の風俗や家屋に泥と石灰で描いた壁面装飾，ラクダやヤギの毛を用いた放牧用具などであり，中でも，鏡片を縫い付けることで有名な彼らの刺繍布は，鮮やかな色彩と多様な文様表現によって制作され，1970年代頃からインド国内外で注目されてきた。

この経緯にはカッチ県での手工芸振興活動と深い関わりがある。インド独立後，初代首相であるネルー首相（Pandit Jawaharalal Nehru　在職1947-64）は，手工芸と手織産業の育成を試み，1952年に全インド手工芸委員会（All India Handicrafuts Board）を設立し，手工芸振興についてインド政府を挙げてさまざまな活動を行うようになった。そして，1956年にはデリーに国立手工芸・手織博物館（National Handicrafts and Handlooms Museum），1961年にはグジャラート州の中心都市・アフマダーバードに国立デザイン研究所（National Institute of Design）が設立された。このような動きの中で1974年にグジャラート州政府手工芸公社が設立され，その後，1976年にカッチ県の首都ブジ（Bhuj）に手工芸宣伝広告・事業拡大センター（Handicrafts Marketing & Service Extension Center）も設立された。そして，これらを契機にカッチ県の手工芸振興活動が盛んになっていった。ただし，これらの活動の中心は職人による商品を対象としたものが多かった。

一方，1969年にカッチ県を襲った大旱魃の飢餓救済活動事業によって，この地方の女性による刺繍技術が注目され，女性たちの刺繍の継承を目的とした振興活動も活発になった。そして，1989年に国立手工芸・手織博物館においてラバーリーの刺繍布の実演販売が行わ

れ，彼らの刺繍布が徐々に有名になっていった。

ラバーリーの刺繍布の特徴は布に鏡片を縫い付けるミラー刺繍であり，彼らの制作する刺繍布が他の民族集団の刺繍布より豊かな表現力を持っていることは，さまざまな形の鏡片を作り出す技術を持ち，多種類の鏡片を用いることで，自ずと布の上に豊かな文様を表現できるからである。また，文字のないラバーリー語による彼らの社会において文様とは，文字のかわりになる重要な存在であったため多くの伝統的文様が継承され続けてきた。そして，このように制作された刺繍布は，結婚時の持参財としての重要な役割を持っていた。

しかし近年，ラバーリーの族長は「刺繍禁止令」を発令した。この禁止令は，1994年にデバラヤラバーリー，1998年にヴァガディアラバーリーの族長によって発令され，婚礼衣裳をはじめとするすべての衣裳と持参財としての刺繍布の制作を禁止するものであった。

この背景には，ラバーリーの刺繍布が観光客へ高値で販売されることが一つの要因として考えられる。以前は，親戚内で協力をしながら準備をしてきた刺繍布を他者へ販売してしまうことで，持参財の不足といった事態をまねき，結婚の延期や中止といったことがラバーリー社会において問題になった。また，移牧から定住へと生活形態の変化によって，子供のころから学校へ行き，刺繍に費やす時間よりも教育に時間をかけるべきだという考えも生まれ，このような状態を懸念した族長が禁止令を発令したのである。そして，現在では，刺繍の代用としてやモールやレース，またはジグザグミシンによる文様表現を行っている。

ただし，持参財としてではなく，手工芸振興活動による商品としての刺繍布の制作に限って行うことは許可をされているのである。しかし，多くのカッチ県の女性が積極的に振興活動に参加していることに対して，ラバーリーの女性は明らかにこの活動へは消極的である。この理由には外部の人が主導となってアレンジしたデザインを指定された布，色糸によって制作することや，自ら工夫をすることのできない商品としての刺繍布を制作することに対する抵抗が挙げられる。また，委託側も伝統的な文様を継承せず，こだわりを持っていない民族に制作を依頼するほうが簡単であるとも考えていた。

つまり，持参財としての役割を持っていた刺繍布がラバーリー以外の他者からの評価の高さによって，その動きとは逆にラバーリー社会の中で禁止をしてしまう，また，現在では禁止令が出たために，さらに昔のラバーリーの刺繍布が高い評価をうけ，商品としてラバーリーの文様が多く使われるようになり，それをラバーリー以外の女性が制作するという新たな動きが起きている。

2001年のカッチ県を震源地としたインド西部大地震後，インド国内外の政府やＮＧＯがこの地域において手工芸復興活動を活発に行い，この活動の一つにラバーリーの女性たちにミシンを配付するというものがあった。その結果，現在，唯一，カッチ県の３集団の中で刺繍禁止令の出ていないカシラバリにおいて他の２集団同様にジグザグミシンによる文様表現が盛んに行われるようになってきている。また，彼らの壁面装飾もこの震災により崩れ落ち，震災後，これらを小片にして販売するという新しい動きもある。

今後，カッチ県での手工芸復興活動がこの地方の手工芸にどのような影響を与えるのか，また，ラバーリーの手工芸技術が，この震災によってどのように変化し続けてゆくか，さらなる追加調査を試みたい。